夢で体験される痛覚の頻度に関する調査

○岡田 斉

(文教大学人間科学部)

キーワード: 痛覚、夢想起頻度、夢見

A survey of pain in dreams

OKADA Hitoshi

(Bunkyo University)

Key words: pain, dream recall, dreaming

夢の中では痛みは体験されないで、痛みの有無を確認することで夢を見ているのか目覚めているのかを確認することができると言われてきた。しかし、Nielsen, McGregor, Zadra, Ilnicky and Oullet (1993) が片膝に血圧測定用のカフによって圧力をかけ、REM 睡眠中にそれほど強くはない痛みを引き起こした結果、31% の夢に痛みが取り込まれることを見出したこと、Raymond, Nielsen, Lavigne, and Choinière (2002) が重い火傷を負った患者の夢を調べ痛みが伴うものが 30% あることを見出したこと、Zadra, Nielsen, Germain, Lavigne, and Donderi (1998) が一般の大学生に対する調査から過去に少なくとも夢の中で痛みを体験した人の比率は 50% になることを見出していることから、これはすでに過去の話となっている。夢の中でも痛みは感じられるのである。Knuth and Schredl (2011) はこれらの研究が実際に痛みの感覚があった場合にそれが夢に取り込まれることを示しているが、それに加えて実際には原因となる痛みがないにもかかわらず夢の中で痛みを感じる体験、他人の痛みを感じる体験もあることも示唆し、これらは記憶によって生じた痛みであると述べている。しかし、後者に関してはその実態やメカニズムについての検討はほとんどなされていない。そこで、本研究では一般学生を対象に主として記憶によって生じたと考えられる夢の中での痛みの体験についてより詳細に検討する目的で質問紙の作成を試みたので報告する。

方 法

調査対象者：女子大学生、175 人。年齢は 18 から 26 歳、平均 19.5 歳 (SD1.08 歳) であった。

調査方法：夢の中で痛みを感じた体験に関して自由記述を求め、その結果得られた報告をもとに夢の中で痛みを感じた体験の頻度を問う 13 項目を作成した。項目は夢で痛みを感じた体験と痛みを感じるはずなのに感じなかった体験からなる。前者は、「夢の中で痛いと感じていたところが、目覚めたとき実際に痛かった」、「夢の中で撃たれ、痛みを感じたことがある」、「夢の中で刺され、痛みを感じた」、「夢の中で噛まれて痛かった」、「夢の中で何かに挟まれて痛かった」、「夢の中で切られ、痛かった」、「夢の中でぶたれたり、ひっぱたかれたりして痛かった」、の 7 項目。後者は「夢の中で撃たれたことはあるが痛みは感じなかった」、「夢の中で切られたが痛くなかった」、「夢の中で噛まれたが痛くなかった」、「夢の中で刺されたことはあるが、痛くなかった」、「夢の中でぶたれたり、ひっぱたかれたりしたが、痛くなかった」、「夢の中で何かに挟まったが痛くなかった」の 6 項目であった。これらを「いつもある」を 5、「時々ある」を 4、「たまにある」を 3、「めったにない」を 2、「全くない」を 1 とする 5 段階で評定することが求められた。夢体験全般と痛みの体験の関連を検討するために夢見の頻度、感覚体験別頻度、感情体験別頻度などを 5 段階で評定する（感情に関しては 6 段階）、26 項目からなる尺度を、攻撃性との関連性を検討するために Buss-Perry 攻撃性質問紙を、特性不安との関

連性を検討するために STAI を同時に実施した。

手続き：授業時間内に配布し、その場で評定を求めた。

結 果

夢の中での痛みに関する 13 項目について主成分分析を用いて因子の抽出を行い、直接 oblimin 回転を施した。その結果、固有値 1 の基準で 2 因子が抽出され、寄与率は 65% となった。因子間相関は 0.14 と有意ではなかった。2 因子は事前に想定した夢の中で痛みを感じたことがある体験と痛みを感じるはずなのに感じなかった体験に関する項目にそれぞれ対応した。前者 7 項目の α 係数は 0.908 に、後者の 6 項目では 0.881 と高い値となった。

痛みありの 7 項目と痛みなしの 6 項目のそれぞれの和を算出した。痛みありの平均は 14.0 (SD:6.4)、痛みなしの平均は 13.8 (SD:6.1)、前者の 1 項目平均は約 2 点で「めったにない」に近く、後者はそれよりはやや多い。得点の分布を検討したところ、いずれもすべての項目で「まったくない」の対象者が最も多かったが、痛みありの尺度で 20% 程度、痛みなしの尺度で 12% 程度であり、頻度は低いものの夢の中で痛みを経験したことがない人のほうが少数である傾向が見られた。

それぞれの得点の上位約 30%、下位約 30% に入る対象者を選び、痛みがない夢も痛みがある夢も多い群 (26 人)、痛みのない夢は多いが痛みのある夢は少ない群 (11 人)、痛みのない夢は少なく痛みのある夢が多い群 (7 人)、痛みのある夢もない夢も少ない群 (37 人) の 4 群間で夢の形式的特徴に関する質問紙の項目ごとの得点について検討した。4 群間で有意となった項目は 26 項目中 9 項目であった。多重比較の結果、「飛ぶ夢」、「落ちる夢」、希望を感じる頻度に関しては痛みのある夢もない夢も多い群のほうがどちらも少ない群よりも頻度が高かった。夢想起頻度については痛みのない夢は少なく痛みのある夢が多い群がどちらも少ない群よりも頻度が高かった。「追いかけられる夢」、皮膚感覚、味覚、嗅覚、内臓感覚の頻度の 4 項目では、どちらも少ない群の頻度が、どちらも多い群・痛みが多い群よりも少ない傾向が見られた。攻撃性質問紙と STAI については差は見られなかった。

考 察

Zadra, et al. (1998)、Knuth and Schredl (2011) らが報告したように一般の学生を対象とした調査の結果、夢の中で痛みが体験されることが確認できた。一方で痛みを感じるはずの場面で痛みを感じない体験もある程度あり、これらは互いに独立した現象であることが示唆された。数は少ないが夢の中で痛みを感じる人は夢想起頻度が高く、一般的に夢では体験されにくい感覚体験が多いことが見出された。しかし、痛みと関連することが予想された攻撃性や特性不安は無関係であった。夢の中での痛みの経験と関連する指標を探り、夢の中での痛みの知覚の機制について検討する必要があると思われる。

本研究は文教大学人間科学部心理学科の影山奈津美さんの卒業研究として行われたものに加筆修正を加えたものである。